

1) 医療関連防止対策のエビデンスとプラクティスを考える

¹ 自治医科大学 附属病院 感染制御部

○森澤 雄司¹

今日の感染防止対策は、すべての領域における医療と同じく、科学的根拠、すなわちエビデンスに基くことが求められている。国内国外を問わず様々な学会や機関がエビデンスに基いたガイドラインを公表しており、感染防止対策を実践する上であるべき方向性を示す指針としている。しかし、医療の現場を常にあるべき姿とするのは極めて難しく、ガイドラインに記載された内容を現場のプラクティスとしては実践できないことも珍しくない。実際には感染防止リスクアセスメントに基いた現実的な判断が求められる。その一方、感染防止対策の科学的根拠を積み重ねる努力がなければ、客観的な質の向上や医療に求められる標準化、その説明責任を果すことは出来ない。安全で質の高い医療を提供することが求められている今日にあって、現場に求められているのは経済性も考慮した継続的な質改善活動であり、マニュアルを作成するのに止まらず、サバイランス活動によって医療の質を保証していく必要があるが、現実の医療の現場は極めて多様であり、そこから普遍的な根拠となるようなデータを集積する困難を認識しておく必要がある。これまでのアウトブレイク対策の経験や日常的な医療従事者の職業感染対策の実践から、ガイドラインに記載された内容を検討しつつ、現場の視点で感染防止対策を考え直し、エビデンスとプラクティス、ガイドラインとマニュアルの関係を考えてみたい。